

日刊 動労千葉

83. 7. 1

No. 1379

国鉄千葉動力車労働組合

千葉市要町二一八（動力車会館）
（鉄電）二九三五・六（公衆）〇四七二・二七二〇七



動乗勤制度改悪に率先協力する 動労「本部」革マルの裏切りを許すな

「動労本部」全日戦長会議方針を弾劾す

国鉄当局は動乗勤制度改悪の早期決着にむけて全力で迫っています。すでに何度も明らかにしている通り、動乗勤制度の改悪は乗務効率の強化により要員合理化をはかるもので、国鉄二十万人台体制にむけた重大な国鉄労働運動解体攻撃であります。ところで動労「本部」革マルは、当局の先兵としての姿をむき出しにすべての国鉄労働者に動乗勤制度改悪への屈服、受け入れを強要しています。われわれは六月十七日の「第六回全国戦術委員長会議」における反動的「方針」を怒りをこめて暴露、弾劾するものであります。

「冬の時代」論なる革マル式 情勢認識で一切の闘いを圧殺する 動労「本部」革マル

動労「本部」は「戦長会議」での「『内達改正』問題を中心した（ママ）交渉経過と今後の取り組みについて」の中で、どのように主張しているのでしょうか。まず、「はじめに」の2項において、「国鉄をとりまく厳しい状況と攻撃の激化から、内達問題を自立させ、そのみを議論するという対応では、国鉄労働者の利益を守ることが不可能という事態に立ち至りました」と述べています。

動労「本部」革マルは、体制的危機のもとで延命をはかる日帝の凶暴な攻撃を一面的にとらえ、革マル式「冬の時代」論なる情勢認識に基づき、路線を変質させてきました。すなわち、一九八二年三月の定中委で「働こう運動方針」を決定し、「職場からの実力闘争では大刀打ちできないし、むしろ敵の思うツボにはまる」「だから闘うべきではない」「国鉄を守るために働き度を高めよう」と絶叫し、すべての合理化、既得権剥奪攻撃を受け入れてきたばかりか、闘いに決起した労働者を叩きつぶす当局の先兵としてたちあらわれてきました。そして今、動力車職場を直撃する動乗勤制度改悪について、「敵しから闘ってもむだに闘うべきではない」と主張し、すべての国鉄労働者に全面屈服を強要しているのです。

裏切りの紋章「貨物安定」宣言を評価し 当局に忠誠を誓う動労「本部」革マル

さらに、「はじめに」の3項では、「政府・自民党、国鉄当局の攻撃の中で国鉄労働者の利益を守る闘いを追及してきた」として次のように述べています。

「・・・組合員の利益を守るために、動力車労組はこんにちの国鉄の状況や物流動向を見通すなかで、貨物安定輸送について対処してきました。当局をして『動労の貨物安定輸送なかりせばこんにちの貨物さえも維持できず、早期に惨状を呈し

ていたことは明々白々だ』と言わしめています。われわれは自らの職場を守るために、『国鉄貨物の荷主離れの原因が労働組合の側にある』と言うならばその条件を整える、従って職場と仕事は確保すべきだ」との対処を主体的判断に基づいて行ってきたのであります。

引用が長くなりましたが、われわれはこの文章を怒りなしに読むことができました。なぜなら、一九七八年の動労津山全国大会において、「貨物削減は過剰資本の処理形態であり、合理化ではない。従って貨物輸送のカイ離については当局の論理を認めざるを得ず、戦術として貨物をスト対象からはずす」なる悪名高き「貨物安定輸送」宣言を発し、以後「53・10」「55・10」をはじめとする未曾有の大合理化攻撃にはずみを与え、自ら率先して大裏切りを行ってきたことを最大限評価しているからです。

動労「本部」革マルは、なんと当局に「動労の安定輸送のおかげで貨物の惨状を何とか食い込んでいる」とほめられたと得意になっていますが、ここに企業防衛主義、労使協調路線の姿をはっきりとみることが出来ます。当局に頭をなでられほめられて尻尾を振っている今日の動労「本部」革マルの姿こそ「惨状」というにふさわしいものではないか、しかし、今日はつきりとつきつけられてきている「59・2」貨物全廃大合理化の攻撃を見るまでもなく、彼ら動労「本部」革マル反動分子の「安定宣言」路線が、決して「職場と仕事を守る」などというしろものではなく、国鉄労働者を闘わずして敵に売り渡す大裏切りの方針であったことは、今や誰の眼にも明らかである。大破産したものを、彼らの「安定宣言」なる大ベテンの大裏切りの路線なのである。

さらに、「はじめに」の結びでは、「動乗勤制度改正」についても「成果と教訓に基づき取り組む（働こう運動で当局に協力しよう！）」と呼びかけていることを絶対に許してはなりません。次回①では、「内達問題に対するわれわれの主張について」と「今後の取り組みについて」なる反動方針を暴露、弾劾します。